

日本体育学会
体育哲学専門領域

会報

Vol.16(1), April, 2012

記事

巻頭言
体育哲学考
書籍紹介
私の研究
2012 箱根合宿研究会のお知らせ
関連シンポジウム報告
運営委員会からのお知らせ
体育哲学専門領域研究会のお知らせ
次号予告

巻頭言

「非反省的实践家としての中年親父」から考える

新保 淳(静岡大学)

いわゆる「反省的实践家」は、常に向上心を持った存在として位置づけられている。しかしながら、この「生き方」のベクトルとは真逆の方向性を持った人類が存在する。それが世間一般の呼ぶところの「中年親父」である。この存在がどのようなものであるか、ある文献を例にして検討して見ることにする。

- 1) 非反省的实践家としての中年親父は、物事を認識し計画する能力が、自分自身と同様、周囲の人々にもあるとは考えない(自尊心がやたらと高い)。
- 2) 非反省的实践家としての中年親父は、計画された行為が周囲の人々によって異なった意味を持つことを理解しておらず、中年親父として自分が行っている行為がどんな意味を持っているのかを発見しようとしなない(周囲の空気が読めない)。
- 3) 非反省的实践家としての中年親父は、自分が理解していることを周囲の人々が使用することができるようにならなければならないと考えている(強引である)。
- 4) 非反省的实践家としての中年親父は、自分が理解していることを反省し直す必要があることを知ってはいるものの、周囲の人々との対話を通して自らの限界を見出そうとはしない(頑固である)。
- 5) 非反省的实践家としての中年親父は、周囲の人々に対して一方的な信頼を寄せることを求める(自己中心的ある)。

ここに、自尊心がやたらと高く、周りの空気が読めず、物事を強引に進める、頑固で自己中心的な「中年親父」の姿が浮かび上がってくる。ひどいものである。人生、長く生きれば生きるほど、こうした傾向が強まるのであろう。

これらの問題を解決するための方策は、あるのであろうか。最近の若者は、「ライフログ」と呼ばれる記録をブログ等に残しつつ、自分の人生を省みていると言われているにもかかわらず、こうした状況を打破する兆しは見えない。ああー、どうすれば良いのか...

「反省的实践家」の養成を中心とするテーマを扱う上でも、当たり前のことではあるが、前述の悩みと同様のまさに実践的問題が孕んでいる。「中年親父と呼ばれる皆さん、より長く生きていきましょう」と皆さんに声をかけることは、たやすい。しかしながら「はい、分かりました。明日からは、そうした生き方をします」と即答してもらえたとしても、そ

の通りに実践してもらえ保障はどこにもない。残されるのは、ある意味での空しさである。

以上が、最近の自分の姿と研究の接点である。

新保 淳 (ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp)

体育哲学考 もし体育哲学専門領域会員がドラッカーの『マネジメント』を読んだら

木庭康樹 (広島大学)

ちょうど昨年の春、200万部を超えるベストセラーとなった「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」の著者、岩崎夏海氏の講演を聞きに行ってきました。それは、大手文具メーカーの大塚商会が主催した企業セミナーの一つで、テーマは「なぜ今ドラッカーが求められるのか」だったと思います。会場は、自宅からもほど近いANAクラウンプラザホテル広島で、かの有名な平和大通りも、ちょうど春うらら桜舞う季節に包まれていたように記憶しています。

当時は、『もしドラ』アニメ版の放送がNHK総合テレビで開始され、さらにその夏にはAKB48を配役に据えた『もしドラ』の映画版が公開されるという、まさに『もしドラ』ブームの絶頂の最中にありました。僕自身は、とくに招待されたわけでもAKB48のファンなわけでもなく、ただドラッカーについての話が聞きたくて、ネットの一般公募に応募し、たまたま当選して参加することができたのでした。

さて、その『もしドラ』の著者である岩崎夏海氏は、放送作家として『とんねるずのみなさんのおかげです』『ダウンタウンのごっつええ感じ』『クイズ赤恥青恥』等、テレビ番組の制作に参加した後、2005年から2007年まで人気アイドルグループAKB48のアシスタントプロデューサーを務めたという経歴の持ち主です。しかし、その経歴とは裏腹に、僕が受けたかれの印象は、「真面目な大学の先生?!」。そもそも秋元康氏を師事したことから、もう少し茶目っ気のある人かと思ったのですが、セミナーは、所謂「真面目な大学の先生?!」の講義が淡々と進んでいく感じでした。

また、セミナー当日は、平日ということもあって、高校生や大学生といった若い世代の参加者はほとんど見当たりませんでした。逆に、スーツにネクタイのサラリーマンが大多数。しかも、途中、ヨーロッパの産業革命以後の政治・経済の話が延々と続いたので、眠くなった人も多かったのでは? まあ、セミナーのテーマも、『もしドラ』や「AKB48」ではなく、「なぜ今ドラッカーが求められるのか」という少々堅いテーマなので、ある意味仕方がなかったのかもかもしれませんが、僕自身は大変勉強になりました。

なかでも、一番強烈に印象に残ったのは、GM副社長ニコラス・ドレイスタットが行った「人の強みを生かす」人員配置のエピソード。こんなにインパクトのある話は、おそらく僕自身、プラトンの「洞窟の比喻」を読んで以来だったと思います。

その岩崎氏が紹介したドラッカーの話によると、1940年代、軍事産業の人手不足解消のために、当時のGM副社長だったニコラス・ドレイスタットは、徴兵された黒人男性の顧客を失い町にあふれかえていた黒人娼婦たちを工場に雇用し、膨大な生産効果を上げ、見事政府の要求にこたえる。その手法とは、まさに差別や偏見を捨て人の「強み」を発揮させる「適材適所」の人員配置。

通常ならば、文字も読めず学歴もない黒人娼婦たちを工場に雇用するなど、到底思いつかないが、ニコラス・ドレイスタットは、まず武器や戦車の作業工程の写真を工場の壁に貼り、彼女たちだれもがわかりやすく目に触れるよう、作業の手順を示した。

また次に、黒人娼婦の中にも色々な長所を持った人がいる。逆に各々に短所はあるけれども、

全員が無能ではない。ニコラス・ドレイスタットは、彼女ら全員の長所と短所を「チャート」にまとめていった。言わば、ある種の「マーケティング（現状分析）」である。そして、その全員のチャートを工場のチャートと重ね合わせ、工場のチャートが全員のチャートの方に適合するよう、何と！工場を改築してしまう。

さらに加えて、彼女らにチーム制を導入し、チーム間で競争をさせた。ただ、チームのリーダーは、女性ということではなかなか成り手がなく、内輪もめが多かったのもともと彼女たちをよく知っていた売春の斡旋業者の男性をリーダーに当てた。すると、チーム全体の統制がとれ、工場はみるみるうちに生産力を上げ、以前はろくに食事にもありつけず世間からも虐げられてきた黒人娼婦たちも、安定した収入が得られるようになり、少しずつ「幸せ」になっていった。

そして、ニコラス・ドレイスタットは、彼女らの働きぶりが会社に貢献するだけでなく社会にも貢献していることを、フィードバックとして彼女らに示し、彼女らにその実感を与え共有させていくのである。言うならば、偏見を捨て、個人の長所を見極め、適材適所に配置する。さらには、当該組織や社会だけでなく構成員自身をも「幸せ」にする。

『もしドラ』のなかで甲子園出場を目指す弱小高校野球部に共感を持つ人が多かったのも、おそらくこれである。多少スポーツのスキルが低くても、部の運営費や環境が乏しくても、お互いの長所や短所を理解し、適材適所で補い合えば、大きな成果を残すことができる。ニコラス・ドレイスタットが行った大改革も、そんな勇気を与えてくれたエピソードでした。

さて、会員不足・若手不足が叫ばれる、体育哲学専門領域も、そのような「チャート」を作ろうと思えば、できるはず？ 研究の役割分担も、領域の運営も。もちろん、縦割りとか年功序列とか、従来の役割分担ではなく、内外の現実に即した、あるいは、構成員それぞれの「強み」を活かした「チャート」作りができるのかもしれませんが。当該組織や社会だけでなく構成員自身をも「幸せ」にするような……。

そう、「チャート」で思い出しましたが、横の席のサラリーマン風の人が、講演の内容をブレインチャートでメモをとりながら整理していたのには、驚きました！ 僕なんかは、左に「重要事項」右に「脱線話」と、二つに分けてメモしていただけでしたが（恥）。いずれにしても、いつか体育哲学専門領域も、体育学界にイノベーションを起こしたいですね！

木庭康樹 (kiniwa@hiroshima-u.ac.jp)

書籍紹介

開一夫 『赤ちゃんの不思議』 岩波新書 2011

田中 愛（武蔵大学）

赤ちゃんから「人間の原点」が学べるのではないか。そんな（浅はかな）期待ができたのは平和な妊婦の間だけでした。実際に「赤ちゃん」が筆者宅にやって来てからは毎日が嵐のようで、授乳、おむつ替え、あやしてお風呂に入れて寝かしつけたらもう一日が終わり、「人間とは何ぞや」などと考える際は1秒たりともありません。けれど、そんな生活が結局は生きるということなのかもしねないと、勝手に納得しはじめました。

口に入ってきたものをゴクンと飲み込むという、生命維持に一番大切なことから、物を掴む、寝返りをうつ、座る、這う、立つ、歩く…私たちが普段何気なく生活している全ての場面で赤ちゃんは運動を覚えなければならず、毎日試行錯誤を繰り返します（今のところそれは面白くて仕方がないという様子です）。その姿を見ているだけでも、運動を覚えることが生きることを支えていると実感させられます。

少し落ち着いた頃、ここに挙げた本に出会いました。世の中には「赤ちゃん学」という研究分野があるそうで、2001年には、「日本赤ちゃん学会」なる組織が設立され、心理学、

医療，保育，ロボット工学などさまざまなバックグラウンドをもつ研究者が議論を交わしています。著者の開氏は工学博士ですが，人の発達を理解せずに人にとって本当に良い「モノ」を開発することはできないと考え，ボランティアの親と乳幼児をラボに集めて実験を重ねます（自分の子だけは科学的な目で見るができなかったそうです）。本書ではそれらの実験をはじめ，過去30年における内外の赤ちゃん研究が網羅されています。

実験の方法は心理学ですが，立てる問いは非常に興味深いものとなっています。例えば，「私たちは，先生や親に教えられないと人助けをしないのか？」という問いから，赤ちゃんに備わっている道徳心を調べる実験を紹介します。しつけや教育が始まる前の赤ちゃんであっても，「意地悪な」対象よりも「親切的な」対象に向かって手を伸ばす（リーチング）ことが多く，親切的な対象を好むことを示唆する結果も出ています。

その他にも「赤ちゃんは映像の世界と現実世界が空間的に連続していないことを理解しているか？」，「赤ちゃんはライブと録画の区別ができるか？」等，現代的な問いから実験が続きます。これらの実験からは，赤ちゃんの前言語的コミュニケーション能力が示唆されます。すなわち，「ライブと録画の区別ができるようになるには，双方向のコミュニケーションが必須です。赤ちゃんがライブと録画で異なった反応をするということは，赤ちゃんが単に映像刺激を受け取るだけの受信者ではなく，アクティブに情報を発信し，その結果（相手の反応）に応じて期待をする情報発信者であることを示唆します。」（p.79）

ところで，赤ちゃんは総じてテレビドラマのクライマックスにリモコンボタンを一押しするのが好きなようです。テレビが消えている時や，使っていない古いリモコンを渡しても見向きもしません。この例は，本書では赤ちゃんが持つ望ましい能力として紹介されています。「自己運動に起因する変化とそうでない変化を区別する能力」です。つまり，自分がボタンを押すことによって遠く離れたテレビ画面が変化する，という因果関係を早いうちから学習し，理解しているという証拠なのです。自己運動に起因する刺激とそうでない刺激を区別し，さらにそれを無視できるようにならなければ，外界の重要な情報に注意を向けることができません。従ってこの能力は身の安全を守るためにも，また運動発達にとっても非常に重要な能力と言えます。リモコンは安易に取り上げない方がよいようです。

最後に，赤ちゃん研究をもってしても，人間の“氏か育ちか”という議論が簡単に解決されるわけではありません。しかし，「赤ちゃん」がこれまで考えられていた以上に優れた能力を持っているということがわかる，興味深い1冊です。

田中 愛 (ai@cc.musashi.ac.jp)

私の研究

スポーツ経験の価値を考える

高橋 徹（国土舘大学大学院）

私たちがスポーツを経験することにはどのような意味があるのだろうか。恐れ多くも，このような根源的な問いに対する答えを考えることが私の研究課題です。その一つの方法として，現在は，プラグマティズム思想を読み解くことを通してスポーツ経験の価値を明らかにすることを目指しています。なぜプラグマティズム思想を取り上げるのか，本稿では主にこの点について述べさせていただきます。

スポーツを経験することに教育的な価値が認められるということは，スポーツの存在意義を考える上では欠かすことのできない要点であり，それは従来の体育・スポーツ理論においても少なからず自明のこととされてきました。また，一方で，スポーツが社会の抱える様々な課題，すなわち医療費増大や地域における人間関係の希薄化などの問題を克服することに貢献するという主張も，スポーツの存在意義を考える上では欠かすことのできな

い論点であると言えます。しかしながら、既に多方面から指摘されている通り、スポーツの在り方についてはしばしば疑問を投げかけられることもあります。それに加え、近年では、スポーツそのものに学習対象としての教育的価値を見出してきた学校体育に対しても、教科としての存在理由やその意義が鋭く問われるという事態が生じています。このような状況を受け、スポーツの存在意義を考える一つの視点として、スポーツを経験することの意味や価値を改めて主張する必要性があるのではないかと私は考えています。

さて、このようにスポーツをスポーツの経験として捉えるための理論的基盤はアメリカのプラグマティズム思想によって築き上げられたとされます。その中でも、特にJ.デューイの提唱した経験の考え方、すなわち「活動を通して経験しその経験によって学ぶ」という「経験としての身体活動」の概念の登場によって、スポーツを「スポーツの経験」として捉え、それを考察するための機会が準備されたと言えます。しかし、第二次大戦直後のGHQ 占領期に「進歩主義教育 (progressive education)」として日本に移入されたデューイの経験概念は、移入された直後こそ、体育・スポーツの研究領域においてもその概念の解釈をめぐる様々な議論が起りましたが、その際、「経験によって学ぶ」という考え方が単に「身体活動によって学ぶ」と解釈されたため、経験それ自体に内在する価値やその過程において経験される様々な事柄に対しては十分に考慮されることなく、結果としてもたらされる諸側面での発達のみが評価されることとなりました。またそれ以降、体育・スポーツの研究領域においてプラグマティズム思想を対象とした研究はあまり見られず、従って、その経験概念についても十分な理解がされているとは言えない状況のまま現在に至っているようです。

しかし、プラグマティズム思想自体が消滅してしまった訳ではなく、その思想は、むしろ現在に至るまで脈々と力強く息衝いており、そこで示された様々な概念は哲学、教育学、心理学など数多くの分野に影響を与えています。私は、そのようなプラグマティズム思想の潮流に位置づけられるデューイをはじめとした様々な論者の考え方を知らずして、プラグマティズム思想における経験概念を正しく理解し、それを再評価することが、スポーツを経験することの意味や価値を示す、一つの道筋になるのではないかと考えるに至りました。

プラグマティズム思想に学びつつ、少しでもその深遠な意味を紐解くことで、先に述べました研究課題に取り組んでいきたいと考えています。

高橋 徹 (s0dd001k@kokushikan.ac.jp)

夏期合宿研究会 2012 in HAKONE

深澤浩洋(筑波大学)

本年度も下記の要領で夏期合宿研究会を開催します。今回も土日・祝日(海の日)の日程を組みました。また、特別企画につきまして、企画案を募集します。奮ってご参加下さい。

期日：2012年7月14日(土)、15日(日)、16日(月、祝日)

場所：静雲荘(住所)〒250-0408 神奈川県足柄下郡箱根町強羅 1320

(電話) 0460-82-3591

小田原駅より箱根登山鉄道にて終点・強羅下車/改札口を出て右手地下道をくぐり直進/道なりに左にカーブする坂道を約120m登った右手にあります。

日程表(申込みの状況によって、多少変更になることがあります)

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
14 日(土)							受付	研究会				夕食		
15 日(日)	朝食		研究会			昼食*		研究会				懇親会		
16 日(月)	朝食		研究会		事務協議		解散							

(は次期運営委員の会, *は運営委員会)

特別企画：企画募集

かつて実施しましたラウンドテーブル形式でも、その他の形式でも結構です。企画に関するご提案・ご意見がありましたらお寄せください。深澤 fukasawa@taiiku.tsukuba.ac.jp までよろしくお願いいたします。

費用：22,000 円（予定，去年と同額）

- ・研究会参加費：3,000 円
- ・宿泊費等：19,000 円（全日程参加の場合 / 2 泊朝夕食，懇親会費を含む）
- ・シングルでの宿泊も申し受けます（先着 3 名まで，追加料金：1 泊 2,000 円）
- ・学生，院生，研究生には若干の宿泊費の補助があります。奮ってご参加下さい。

6月18日(月) 必着にてお申込み下さい。

- ・Eメール：お名前，ご所属，連絡先，発表演題，宿泊のご予定（食事の有無を含む）について，深澤委員 fukasawa@taiiku.tsukuba.ac.jp までお知らせください。
- ・同封のハガキ：必要事項の記入と 50 円切手を貼付の上，送付してください。
- ・特に，部分参加の場合は，宿泊および食事の要・不要について正確にお知らせ下さい。
[14 夕食，14 宿泊，15 朝食，15 昼食，15 夕食，15 宿泊，16 朝食]
- ・参加予定に変更が生じた場合は，速やかに担当者までご連絡下さい。
- ・7月6日(金)以降のキャンセルについては不泊料金が必要となります。
詳しい「プログラム」は，7月1日頃にお送りする予定です。

夏期合宿研究会担当運営委員：深澤浩洋

〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学体育系

E-mail：fukasawa@taiiku.tsukuba.ac.jp Tel&Fax：029-853-6341（研究室直通）

お問い合わせは，なるべく E-mail またはファクスをご利用下さい。

関連シンポジウム報告

釜崎 太（明治大学）

今年度，8月22日から24日までの期間，東海大学の湘南キャンパスで開催される日本体育学会のシンポジウム企画の準備を兼ね，3月22日に『身体知』研究の諸相：身体教育（体育）の可能性を探る」と題するシンポジウム（於：明治大学）を開催いたしました。理論心理学をご専門とされている田中彰吾先生（東海大学）からは，メルロ・ポンティをベースに「身体が知の主体であること」についてご報告いただきました。アスリートとしての経験をもちつつ「ことわざ」研究に取り組まれている山口政信先生（明治大学）には，「言葉と身体知」の関係性についてご報告いただきました。最後に，本専門領域の樋口聡先生（広島大学）から，身体知研究の動向とポラニーの「身体知」の概念について詳説していただきました。急な企画でしたのでフロアーの参加に不安もありましたが，本専門領域の先生方のご尽力もあり，35名もの方々にご参集いただくことができました。ありがとうございました。8月24日の日本体育学会では生田久美子先生（田園調布学園大学）をお招きして，さらに「身体知」と「教育」に関する知見を深めていきたいと考えていますので，こちらもよろしくお願いいたします。

運営委員会より

新保 淳(静岡大学)

体育哲学専門領域のHPについて

HPについてお知らせいたします。現在、下記のURLにてHPを公開しております。

<http://163.43.177.95/genri/framepage5.html>

また、これに関するご意見もお寄せ下さい。

「日本体育学会 63 回大会」について

あらためて情報提供させていただきます。

本年度の学会大会のHPは、下記のURLにて閲覧することができます。

<http://www.jspehss63.u-tokai.ac.jp/>

4月5日より第63回大会(in 東海大学)のオンライン参加・発表登録の受付が開始となりました。ご登録〆切は5月7日(月)厳守となっております。

多数のご発表、ご参加をお願いいたします。

「分科会メーリングリストへのご登録のお願い」

メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、「体育哲学専門領域」活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げる次第です。次のような手順で登録できます。

- 1) グループへ参加するには、事務局 ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp までご一報ください。
- 2) 登録完了後、taiikutetsugaku@yahoogroups.jp を用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます。

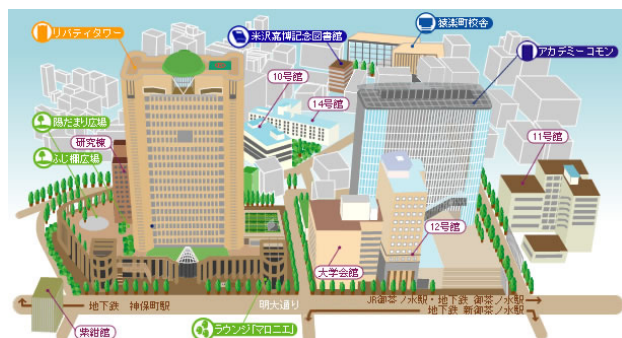
定例研究会のお知らせ

舛本直文(首都大学東京)

平成24年度第1回定例研究会を2012年5月19日(土)に下記の要領で開催いたします。

なお、研究会終了後18時00分より懇親会を予定しております。会員の皆さま、ぜひともご参集ください。

- ・日 時：2012年5月19日(土) 15:00~17:50
- ・会 場 明治大学駿河台キャンパス リバティータワー・8階1084教室
JR中央線・総武線、東京メトロ丸ノ内線/御茶ノ水駅 下車徒歩3分
東京メトロ千代田線/新御茶ノ水駅 下車徒歩5分
都営地下鉄三田線・新宿線、東京メトロ半蔵門線/神保町駅 下車徒歩5分



発表内容

【発表】野川春夫（順天堂大学）スポーツ基本法・基本計画を社会学的な観点から衝く
スポーツ基本法・基本計画について歴史的な変遷を踏まえながら，体育からスポーツへのシフトを社会学的な視点で是々・非々を論じたい。

【発表】釜崎 太（明治大学）反省的实践家としての教師の専門性と身体（暗黙）知
ドナルド・ショーン『The Reflective Practitioner』を読む

教育哲学において「教育」や「学習」の再定義が試みられて久しい。常識的には「教育とはAである」としても，学校の閉塞状況を打破するために，あえて「教育とはBである」と非常に定義してみせること。しかし，それらの概念は，常識の枠内で誤読され，原意とは逆の意味を付与され流布している。そのひとつに，「教師」像の転換を企てた「反省的实践家」の概念があげられる。考案者ショーンの意図を無視した表層的な概念の流通は，彼が意図する「認識論的転換」を台無しにするばかりか，学校改革の障壁にさえなっている。本報告では，哲学者ショーンの原書に立ち戻り，「Reflective Practitioner」の概念を確認する。通俗的な「反省的实践家」像批判によって示されるのは，「身体」と「知」と「研究」の非常識的な定義の意味であり，「身体（暗黙）知」研究の意義である。

【発表】高岡英気（筑波大学大学院）プロスポーツ概念の原理論的研究

本発表は，平成 24 年度に筑波大学に提出予定の博士論文の内容を基にしたものである。発表では，様々な文脈において多義化している「プロスポーツ」概念の，同一的で不変な意味を明らかにするため，原理論的考察を行う。具体的には，スポーツ哲学，文化経済学等の既存の理論を背景に，プロスポーツ概念の関係構造，それが成立するための歴史的・社会的条件を明らかにした上で，様々な特殊形態のあり様を分析していく。

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は釜崎太（明治大学 kamasaki@meiji.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門領域会報第 16 巻第 1 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域
大橋道雄（会長）
編集者 阿部悟郎（広報委員長）
発行日 平成 24 年 4 月 19 日
連絡先 989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18
仙台大学体育学部
0224-55-1147（直通）
アドレス：gr-abe@scn.ac.jp

【編集後記】

なにやら日本体育学会において「分科会」が「領域」へと制度変更になったようです。それにあわせてこの会報名称も「体育哲学領域会報」となりました。なんとなく慣れませんが，われわれの成すべき事はただ一つ。研究活動の推進とその発信でしたね。さしあたっては夏期合宿研究会と日本体育学会第 63 回大会。どんどん発表申込をしましょう。攻撃は最大の防御とか。とりいそぎ，五月は駿河台で激論を。（A. u. Kmsk.）」